わが死後の住処はさるすべりの根元　千田　百里
黒南風や白き卓布に核を問ふ　辻　美奈子
黒潮は太き助走路初鰹　峰崎　成規
アルプスの水の随筆花山葵　矢崎すみ子
夏潮や男生みしは女なる　荒井千佐代
湖は発光体なり山滴る　栗原　公子
理科室の深きシンクや新樹光　大川ゆかり
ライターの火を借りるかほ太宰の忌　広渡　敬雄
鬢付けの歩幅の勁し迎へ梅雨　甲州　千草
葉脈に影といふもの梅雨に入る　細川　洋子
群青の海の切つ先磯なげき　平松うさぎ
奥の間のやうな日溜り梅雨茸　菊地　光子
卯の花腐し泥んこの子を褒める　福島　茂
風が街軽くしてゐる五月かな　須賀ゆかり
いちにちにひとつのしごとかたつむり　稗田　寿明

沖の水脈

サングラスして三人称となりたがる　菅原　健一
夏来る草間彌生の水玉に　七田　文子
蟻地獄謀反はいつも突然に　三好千枝子
ボクサーの津軽訛や修司の忌　阿部眞佐朗
初松魚啖呵を切つてみたきかな　大森　春子
三百年の松は畳々風青し　古居　芳恵
天命をすとんと知つて一夜酒　藤代　康明
書を曝す編集後記の候文　広海あぐり
父の日や普段通りの通過駅　福田　肇
走つても走つても夏霧の中　宮下　桂子
危ふさを秘むる正論雲の峰　澤田　英紀
虹二重色交はれば消ゆる色　頓所　敏雄
咲き満ちて桜淋しき分教場　工藤　邦子
サイダーの百のつぶやき地下茶房　岩波　博庸
梨の花咲き満ち幽かうすみどり　坂田　和子